

# 粗暴傾向のある男生徒の指導

— 中学校から高等学校にかけて —

仙 田 治 雄\*

この記録は、粗暴傾向のある男生徒の、中学校から高等学校にかけての3年間にわたる指導をとおして、行動や心理の変化をみたり、指導にあたった教師の心の動きを記録したものである。教育相談を経験した自分の考え、感じ、それをおして、指導者自身がどのように変化したか、生徒と接しているときの指導者は、どのようであったかを、同時にとらえていこうとしたものである。

## I 目 的

粗暴傾向のある一男生徒と相談者との面接相談を中心として、生徒の変容を考えると同時に、相談者自身の考え、感じ、変容の姿をとらえる。

## II 対 象

(1) 氏名 K(16才 中学2年～高校1年)

(2) 問題行動の概要

Kは、中学校に入学してきてから、とくに目立った生徒であり、何かにつけて乱暴であり、ささいなことで、ほかのクラスのメンバーとけんかしたり、すぐたゝく。授業中は、積極的に発言はするが、好ききらいがはげしく、仕事はあまりしない。新任の若い女教師に対して、わざと質問したり、さわりだりして、授業のさまたげになる。などの問題傾向がみられた。私は、Kが2年生になったときに、担任となったのだが、ちょうどカウンセラー講習をうけていた時でもあり、しかも、Kの眼や行動のずい所にひかれる点を感じ、相談をとおして、Kの成長の一助になれば幸いであると考えた。

(3) 本人の現況

- 性格 非協力的、攻めきの、社会的外向、支配性大、他人にひきずられやすい。D型(Y-G性格検査などより)

元気よくはきはきしている。すぐ怒る。不安傾向大。自省心に欠ける。

- 学業成績と学習態度

2年終了時 5段階評価で、3が3教科、2が4教科、1が2教科。

3年1学期 5段階評価で、3が2教科、2が5教科、1が2教科。

学習態度として目立つのは、落着きがなく、無駄な発言が多い。つねにきょろきょろしてい

\* 加茂市立若宮中学校教諭

る。逆に意欲がなく、あきらめているように見える場面もよく見られる。

診断性団体知能検査 SS A式35 B式43 総合39(－1段階)

標準学力検査(教研式G形式 2年終了時)学力偏差値 5教科平均41 (社会科が好きで成績も一番良い)

○健康状態 すこぶる良好であり、体格も良い。

#### (4) 本人の生育史

- 幼少時 元気がよく健康。末っ子のために、わがままに育てられた。思いどおりにならないとダダをこねるなど、両親も甘やかして育てたので、自分の要求は、ほとんどとおるのが常であった。
- 小学校時代 小学校からの要録によると、集中力にかける、言動が雑である、発表力はある、責任感、根気強さ、協調性、情緒安定の4項目がC、落ち着きがたりない。自己顕示的なところがあり級友は常に批判的である。早口、しょう動的、などと記入されている。

#### (5) 家庭環境

父は大工で、ひとりだち、母は近所の工場で働いている。本人には、まっすぐにのびてほしいと希望している。父は、たたきあげて苦労してきたので、本人に対しても、まじめ、努力を要求し、時にはゲンコツがとぶ。母は口で常に注意している。本人の育て方については、両親共一致した考え方で進められている。兄は父の手伝い、姉も中学校卒業後就職しており、本人に対しては進学をすすめている。二人とも、家庭事情で進学できなかったのも、せめて本人だけとは思っている。兄弟仲は普通である。生活は中程度で、家計状況はわりと良い。家族が全部働きに出ている関係上、学校から帰っても、ひとりであるので、自分のわがままがでやすく、遊びにでたり、テレビに熱中したりしている。

#### (6) 友人関係

友人は表面上は、かなりいるように見えるが、ほんの遊び友だち程度である。H・Y.などのかなり成績優秀児もいる。ソシオマトリックスによると、T-H-Yの三人との関係が、はっきりと浮かびあがってくる。Yは、無口の方であるが、気性がはげしく、気短かで、父親に似てすぐ暴力をふるいやすいタイプである。Kは、自習時間などのとき、ひとりでポツンとしている時がしばしばみられる。

### Ⅲ 方 法

#### 1. 指導方針

- (1) 両親は本人とあまり話しあっていないので、話しあいの場をなるべく多くもつ。
- (2) わがまゝに育てられたために、自己抑制ができないので、抑制力をつけるようにする。
- (3) 時間にルーズである。仕事が特にない、忍耐力がない。など生活態度が確立していないので、生活態度の改善をはかる。そのために、本人として何がはり合いとなるのかを考えさせ、目標をもたせる。
- (4) 本人の気持ちを整理させ、更にじゅう分な自己認知ができるように、素直に自己表現をさせるような機会と場を多くもつ。

- (5) 特定グループ内での関係が深いので、この面からの働きかけの可能性はあるが、また、一方では、このグループのメンバーの一挙一動に左右され易いので、グループ構成にもじゅう分留意する。

## 2. 指導計画

- (1) 面接 中学2年、3年、卒業後と、最低月一回以上、呼び出しを中心に、遊びに来た時なども利用して、接触の機会をなるべく多くもつ。
- (2) 家庭訪問 最低半年に一回の家庭訪問、父兄会での面接などの中で接触の機会をもつ。
- (3) グループ内での指導 リーダーを中心とした無作為の男女混合のグループであるが、リーダーにはあらかじめKの指導を考えた活動を考えるように指示しておく。
- (4) 他教師との連絡を密にする。

## IV 結果と考察

### 1. 指導の経過

4 4 年 4 月 前任者より引継ぎ、担任となる。

5 月 家庭訪問で母と面接。「Kは私のいうことを聞かない。先生から言ってやってほしい。朝は早起きで困るくらいです。家で勉強はほとんどしません。ことばが乱暴で、口答えばかりしています」とのこと。40人の生徒を受け持ったからには、ある程度までの指導は当然としても、先生から言ってやってほしい、とのことばには、またかという感があった。一応やれるだけはやりますと返事してみたものの、母に、父と話しあって両親の希望やKに対する願いを話してやってほしい旨の話をした。このころのKの観察結果では、授業中の落ち着きのなさや、学活時、清掃時のなげやりな態度が目につき、指導を要する生徒であるとの印象を強く受けた。

7 月 父兄会で母と面接。修学旅行（5月）に成人用の雑誌などを持って行って見つけたこと。休憩時間中に教室であばれては、女子をたたき、ガラスをわるなどの事故を起こしたこと、グループ内のメンバーとけんかしたこと、友だちに引きづられたとはいいいながら、天井裏に上ってジュースをのんだりしたことなどからみて、夏休みの1か月間、全く目を離した場合に、何をするかわからないので、じゅうぶんに注意してほしい旨話す。ただし、本人には私の口から言うから、母親からは絶対に言わないことを約束してもらう。しかしながら、この時の母親への話は、母親にとっては、相当のショックであり、2年以上経過した今日でも折りにふれて母親が口にするほどである。この話はすべきだったのか。今でも迷っている。

7 月 Kと面接、呼び出し相談の形で相談室で。Kのみとの特別の形でなく、一般の生徒にも相談するなかで実施。Kにオレだけ特別にという考えを持たせないように配慮した。何か叱られると思って部屋にはいつてきたというので、叱られるようなことをしたのかと

きくと、旅行のこと、天井裏のことなど、今迄すでに知っていることを話す。「ほくは、悪いと思うことはしないようにしているのだが、Yなどにさそわれると、ついそのさそいにのってしまふ。暴力なんかふるっていない。」という。私に対して、こわい、叱られるという考えが先に立っているのだと思うと、自分の今までのきびしいやり方が反省させられた。もっぱら話をきくだけに止めたが、話している途中の態度が落ち着かない、早口、どもりがち(きんちょうのあまりのようだ)だった。Kは、わり合いにおく病であり、人の誘惑にのり易い、自分が中心にいたい、友人にきらわれたくない、などの心理状態にあるのではないかと思うようになった。

12月。グループでの指導。順々に各グループとトランプなどをやりながら話をきいたり、したりしていたのだが、Kは早く順番が来るといいと心待ちにしていた。トランプ、カルタなどのカードゲームは大好きだといい、実に積極的にゲームに参加した。グループのメンバー同志で冗談を言いながらやっていたのだが、Kは実によくしゃべる。メンバーや級友のあだ名の言いあいや、授業の話、先生方の悪口、1年生や3年生の女子の話、と次々に出た。私は、言いたいことをいうKたちの姿をみて、この機会は決してマイナスではなかったのだという感を深くした。

○これまでの何回かのKとの接触の中で、面接を主として、なるべくKに話をさせるようにして来たが、行動面では叱ることも少なくはなかった。Kは、頭をたれてきいている。自分の話していることが、大人の考えであり、Kの気持ちを無視しているのではないかと思いながらも、早くKの行動にあらわれることを期待して、説教じみたものになったのだと思う。

○女教師との連絡。Kが特に関心をもっている女教師は、「Kは、授業中よけいな話をしたり、わざと注意をうけるような行動をする。授業がやりにくくて困る。」というので、「Kの異常とも思える態度は、あなたへの好意の表現方法であり、決して悪意からでているものではない。かえって、あなたのひとことが、Kには、よい忠告となるのだから言ってやってほしい」と依頼。数日後、「Kがあまり、うるさいので、うるさいあなたなんて、大きらいだ、といってやったら、その後は驚くほど静かです」とのこと。Kにはショックだったのだから、あとは普通に接してやってほしい旨話す。Kには良い薬なのだがかわいそうだったと思った。

45年4月 Kと面接。3年生になって最初の面接。進路について、「高校に入学したいのだが、勉強もしてないので、自信がない。友だちも行くのだから、ほくも行きたい。」という。

「それなら、勉強しなければならぬし、今迄みたいのわけには行かないはずだ。1学期の計画をきちんと立ててやらなければならないのだが、どうする」と、いささか時間の制約もあって、結論を急ぎすぎしてしまった。Kの発言をじっと待つ。グループ体験が思い起こされて来た。やがて、仕方がないという様子で、「とにかく、少しずつ勉強するが、わからないところがたくさんあって、何から手をつければいいのかわからない。」

といい出した。「あせりの気持ちは、だれにでもある。しかし、それをのりこえなければこの難関は突破できない。わからなかったらいつでも聞くがいい。」と激励してから、生活面の計画をきく。がぜん、声にもはりが出てきた。「去年は、陸上大会で入賞できなかったから、今年はどうしても勝ちたい。」という。「今年負けたら、頭の毛を切るか」というと、少し困ったような顔をしていたが、「いい」と返答してくれた。あんまり期待もしていなかったのだが、当面の目標ができたことで、生活がきちんとできるといいのだがと内心は思ったが、今言ってもと考え、だまっていた。忍耐の必要性、努力の価値、対人関係の重要性を体験させる重要な場面としては絶好のチャンスだと思った。

7月 Kと面接。夏休みの計画をきく。市内大会までの努力をたたえたら、中越大会でも、がんばりたい。どうしても入賞したい。苦しいががんばるとのこと。もっぱら聞き役として、本人の考えをいかにうまく引き出させるかを考えていたので、ことばの一つ一つが気になり、非常につかれた。カウンセリングについていろいろと講習が進んでくるにつれてかえって考えるようになり、今まで無意識だったのにテクニク的なことがいやに気になった。

7月 家庭訪問で父親と面接。母親とKがいっしょにいるところで、父親は始めてKに話をするのだがと前置きして、「私は今まで一匹おおかみとしてやってきたのだが、とにかく一生けん命にやってなんとかひとりだちできるところまできた。ひとさまに迷惑をかけないように精一杯やってきたつもりだ」と話してくれた。Kに果たして本当にわかったかなあという不安もあったが、Kが真剣にきいている様子が見え、これだけでも私の夜間の家庭訪問の成果があったとうれしく思った。

9月 Kと面接。夏休みの出来事、二学期の計画をきく。ついでに「今までの生活をふりかえって、何か考えることはないか」との質問に、「今まで2年生の頃先生にさからったり、さわいだりしたことがたくさんあったが、どうしてあんなことを言ったり、したりしたのかわからない。今考えてみると全くつまらないことだった。」と言う。本心から言っているのかどうか、全面的に信頼もできないが、今までの面接の成果が少しでもあらわれたのかなと思い、うれしくなった。

46年1月 9月以降月1～2回程度面接。進学か就職か。Kの迷い、不安、あせり、両親が訓練校へ行けというのに対する不満等を聞く。何とかしてやりたいと思う。しかし、学習のことになると、あまりやっていない、する気になれない、すぐあきてしまうといわれて腹が立ってくる。ここで怒ってはと思い、もっと話してやらなければと考え直した。

1月 Kが突然、家に訪ねて来る。5月ころに暴力ざたがあり、それがまだ尾をひいているので何とかしてほしいとのこと。今迄なぜ言わなかったのかと聞くと、「先生に叱られる。他のグループのメンバーに知れるのがいやだ。他のクラスのものに知られたくない。」という。なぜもっと早く言ってくれなかったのか、まだKにとって、私はこわい存在だったのか。私への信頼が期待したほどでなかったのか。Kの心の中に、5月以来ずっと

わだかまっていたはずなのに気の毒だ。それにしても今までかなり気をつけてみていたつもりなのに、Kのけがにも気付かなかった観察の甘さ、本人の気持ちをまだ読みとれないふがいなさ。もろもろの思いでがくぜんとした。

## 2. 最近の様子

中学卒業後も、毎月のように自宅や学校に遊びに来て、いろいろと話をしてくれるようになった。その中からいくつかを引用してみたい。「進学してから、ぼくは、でっかい顔をしているとインネンをつけられて同級生の一人になぐられた。ぼくは本気になってけんかしようと思ったがやめた。やればやれるけれどつまらない。高校にはいったからには勉強しなければならないし、けんかなんかばかり考えていては、自分にとって少しもプラスにならない。」「今になって考えると、中学生の頃は、一部には勉強する人もいたが、どうってことなくさわぐ人がたくさんいたので、自分もつられてさわいでしまった。」  
「父に対しては、今でも頭が上がらない。最近は生活の一つ一つにきびしく条件をつける。帰宅時間でも、いちいちうるさく言われる。もう少し大人あつかいしてほしい。」

## V おわりに

Kとの2年半の接触の中で、考えさせられる点がたくさんあった。現在のKは、以前とくらべれば、かなり自分を知り、言動にも慎重さが出てきたし、私の話もよく聞いてくれるようになった。始めは、担任教師として、本人を、少なくとも在学中は非行のないように、うまく高校にはいれるように指導しなければという使命感のようなものがあって、共感的態度で接しようと思いつつも、指導が先だってしまった。Kの気持ちの理解者として少しでも役立ちたいと思ってきたが、Kにはその気持ちが本当にわかってくれたかどうか疑問である。高校入学後はもっぱら聞き役であり助言する立場にいる。Kは、前よりも安心して話してくれるようであり、高校生活の批判がよくきかれるようになった。

Kの母親からは、「まだ親の言うことをきいてくれない。頼りになるのは先生だけです。」といわれれば少しでも両親の考えるような子どもになってほしいと願い、親の気持ちはある程度はわかっているけれども、もう少し好きにやらせてほしいというKのことばを聞けば、そうもしてやりたいと思う。結局両者の仲介役としては、やはり助言が中心となり、成果はすぐには出ないと思う。私の存在は、それでいいのだと割り切るしかないのだと思っている。

Kに接している中で、カウンセリング的手法がなければ、Kとの接触は決して長続きしなかったであろうこと。相手を認めることがいかに大切であるかということ。忍耐や相手への賞讃は相談者にとって必要な条件であること。などが実感としてとらえられるようになった。

今後すくなくとも、高校卒業までは絶えず接触を保ちながらKのひとり立ちする姿を見守ってやりたいものだと思う。